



編集月旦 2015年3月号

★各地各界の敬愛するみなさまへ

高齢者が「成熟+円熟力で歴史をつくる」現場を睹(み)る者として 記  
春山如笑。

迷惑mailに紛れて、mail迷惑にならないことを祈りつつ。

☆海洋国家（世界十指に入る）である日本の、環太平洋ダイヤモンド・リングの一画である千葉県の、南九十九里の一角から、全国各地で「一盤散沙」（いちばんさんさ・大皿の上に散らした砂のようにばらばら）さながらに、自立・孤立してNPO活動や高齢社会活動をつづけておられるみなさまに訴えます。

☆新世紀になって15年、綿密には1999年の「国際高齢者年」から、やや厳密には1995年の「高齢社会対策基本法」制定から20年。わが国の歴代首相・担当大臣・国会議員を含めて政治リーダーは、介護・医療・認知症といった支えられる側だけで高齢者をとらえて、支え手となってきている高齢者層の存在と役割に理解を示すことができませんでした。

★高連協「高齢者の社会参画に関する調査」の「定年退職後の社会参画の必要性」という設問には97%が「必要」と答えています。そのうちで「収入のある仕事」を望んでいる人（43%）の多いこと、「アベノミクス」で生活が「苦しくなった」（33%）と答えているあたりに、年金生活者の実感が示されています。何より格差容認の社会で高齢者の将来に展望がないことに、静かな深いためいきを聞くことができます。

☆この高齢社会のグランドデザインがない「多岐亡羊」（たきぼうよう・枝道が多いために逃げた羊を見失う）ともいうべき失政15年は、4人にひとりに達したわが国の高齢者の実人生に決定的な萎縮（デフレーション）と目標の欠如をもたらしています。にもかかわらず安倍総理は「女性と若者」に呼びかけていて、地方創生（地域の課題解決）においても「知識・技術・資産」の三本の矢を保持している「支え手の高齢者」を軽視・無視しつづけています。自治体が高齢者参加の環境をつくる前に「エンディングノート」を配布するなどは、あってはならない自滅行政です。

☆もはやこれ以上に高齢者を無視、高齢期人生を軽視されるわけにはいきません。

★史上初の「人生90年」時代を迎えて、高齢期25年（65～90歳）を体現して暮らしているわたしたちは、「引退余生」ではなく、「現役長生」の“丈人力”を活かして、みずからの手で居場所である「地域生活圏」（エイジング・イン・プレイス）の形成を成し遂げねばなりませんし、新たなふるさと創生をめざす若い人びととの協働で「成長+成熟+円熟」力を発揮して達成するオールジャパン、オールエイジズの「日本長寿社会」構想を高く掲げて、存在感を示さねばならないでしょう。

☆いまこそ散砂のように自立・孤立ではなく、水玉模様のように輝く小さな活動の輪を連携して、だれもが暮らしやすい地域にするために、各所で同時に足下の一步を踏み出しましょう。「生活支援コーディネーター」を支える高齢者協議体（会）の形成はいまその好機にあります。

新世紀このかた15年、警鐘を鳴らしつづけています。失礼があればお恕ください。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、日本高齢者の課題であり、本誌の目標です。  
（編集人 記）

